

# Newsletter

## INSIDE THIS ISSUE

1. 研究発表要旨
2. 特別講演・ラウンドテーブル

### 【研究発表要旨】

#### A室1

## 日中近代文学作品における 珈琲文化（空間）の表象をめぐって

上智大学（院） 邱 月

本発表は、日中における、珈琲文化移入の初期にあたる近代を対象に、文学者によるカフェ描写の分析を中心において、珈琲店、カフェの公共空間としての機能とその文学表象の可能性とを明らかにしようとするものである。

まず、芥川龍之介の未定稿「銀座の或珈琲店（仮）」（1920年頃の執筆と推測）、永井荷風『つゆのあとさき』（『中央公論』、1931年）を取り上げ、1920年代銀座エンサイクロペディアと言える、安藤更生（1900-1970）『銀座細見』（春陽堂、1931年）と読み合わせることによって、その珈琲店表象・描写の位相を考究する。次に、魯迅（1881-1936）「革命珈琲館」（『三閑集』、1928年）、

いわゆる「海派」作家であった張若谷（1905-1967）『珈琲座談』（上海真善美書店、1929年）などの、近代中国文学におけるカフェ描写を素材に、文学作品に現れた、日中の珈琲文化（空間）表象の変遷を比較検討する。

以上の考察を踏まえて、珈琲店という新しい公共空間が、日中の近代文学作品の中でいかなる表現を獲得したのか、珈琲文化という西洋文化の移入に際して、その受容の態度や姿勢、変容のさせ方において、日中間にいかなる相違があったのかを、モダニズム文化の諸相との関わりも含めて究明していきたい。

#### A室2

## 1950年代日韓写真における「リアリズム」再考

—— 土門拳と林應植の写真活動を中心に ——

東京大学（院） 李 範根

1950年代前半の日本において、土門拳（1909-1990）は「リアリズム」の名の下で、絵画模倣的で耽美性を追求する写真を批判し、終戦後の社会的現実や周りの生活を客観的に捉えることを呼びかけていた。このように彼の「リアリズム」は、絵画とは異なる写真独自の芸術性を志向し、社会的存在としての写真のあり方を目指すものであった。そして、彼の呼びかけに、多くの写真家が共鳴するようになり、庶民や社会の底辺層の暮らしを記録した写真が量産されるなど、「リアリズム」をめぐる写真実践が一種の流行現象と化すようになる。

一方、1950年代の韓国において、林應植（<sup>イム ウンシク</sup>1912-2001）は、朝鮮戦争を経る過程で、耽美主義的な

写真を批判的に考え、人間の生活的なものへのヘレンズを向けることを呼びかけるようになる。「生活主義写真」（生活主義リアリズム）と呼ばれる、林の主張した写真とその内容が、土門の「リアリズム」と類似した側面があることについては、これまで韓国の写真研究の分野では、幾度か指摘はなされたものの、両者の関係性が精緻に考察されることはなかった。現状を踏まえ、本発表では、土門と林の両者による写真言説や、写真作品そのものに焦点を当てて比較分析を試みる。それによって、影響受容関係には収まらない、新たな関係性を編み直すと同時に、日韓に跨がる1950年代の「写真のリアリズム」の問題系を再構築したい。

## ＜悲劇の英雄＞を乗り越えて —— ロジャー・ケイスマント像の変遷 ——

東京都立大学 中村 麻衣子

アイルランド近代史における大事件のひとつに1916年の復活祭蜂起があげられる。その指導者たちは今や建国の英雄に名を連ねているが、中でもロジャー・ケイスマント(Roger Casement)は異例な立場にある。大英帝国の官吏であった彼はアイルランド独立運動に身を投じ、反逆罪で死刑を宣告された。減刑の嘆願が出されながらも、同性愛が疑われて、処刑された人物である。

彼のイメージ形成に大いに寄与したのはW.B.イェイツによる詩であるが、ケイスマントを反イギリスというナショナリズムの枠に収めてしまうことになり、不当に同性愛の疑惑を持たれた殉教者としてのイメージが量産された。

これまでは語られ、議論される客体であったケイスマントは、マリオ・バルガス・リョサの『ケルト人の夢』(Mario Vargas Llosa, *El sueño del celta*, 2010)では語る主体として登場する。過去と現在を行き来する複数の語りで構成されたこの作品では、イギリスやアイルランドの文学や歴史において付与され続けた犠牲者か英雄か、という単純かつ二極化したイメージを越えて、自らのセクシュアリティや夢の挫折などを率直に語る多面的アイデンティティを持った、生身の人間として描かれている。本発表では国境を越え、社会観の変化を経た彼のイメージの変遷を、作品における語りに現れる多層的なケイスマントの人物造形に辿り、そのイメージの新たな位置づけを試みる。

## モリスン『スーラ』におけるシェイクスピア『リア王』表象の変遷 —— 道化とスーラの関係を中心に ——

日本大学 (元教授) 福島 昇

1993年、トニ・モリスンはアメリカの黒人女性として初めてノーベル文学賞を受賞した。モリスンは黒人に対して偏見を抱く白人作家に批判的であるが、決して背を向けているわけではない。モリスンは白人作家の中で、シェイクスピアを特に好み、その主題——人種、権力、セクシュアリティ、変わらぬ愛など——を受容している。『青い眼が欲しい』(1970)は『ハムレット』、『タール・ベイビー』(1981)は『テンペスト』の改訂版であり、『デズデモナ』(2012)は『オセロー』の翻案である。

D・ケーラーは「間テキスト性」の視点から、『スーラ』(1973)が『リア王』の三箇所台詞から着想を得ていると主張する。その一つ、道化の魔法めいた予言はディストピア的エリザベス朝の直接

的風刺とトマス・モア直伝のユートピア的時代風刺である。スーラも道化を模倣し、予言するが、それは二重の意味や皮肉に依存し、予期せぬことを利用し、言葉による素早い驚きやユーモアを用いている。この意味で、スーラは道化と同質の予言をしている。『リア王』と『スーラ』では、真実と狂気、善と悪、喜びと悲しみ、醜悪と美、悲惨と崇高は絶対相容れない二項が対立している訳ではない。道化が未来のユートピア的なブリテンを予言したように、スーラは社会的区別が消え、両極性が解体され、愛が無条件に存在する時代を予言する。

本発表では、道化とスーラの予言を中心に、『スーラ』がいかにか『リア王』を表象しているか考察する。

## 中勸助の戦中・戦後の詩業におけるインド叙事詩「マハーバーラタ」の影響

——「涼しき蔭」及び「山がつとはしばみ」を中心に——

東京都市大学 木内 英実

戦中・戦後の中勸助の文学業績としては岩波書店発行の詩集をはじめとする詩業が挙げられる。日中戦争の初期に日本兵の活躍を賛美しその死を悼む戦争詩を創作し詩集に収録したことは一般に知られていないが、同時期中勸助が着想し創作した童話『鳥の物語』各話が聖書や仏伝など聖典を素材とし道徳や人倫をテーマとしたことから、当時の中勸助の創作意図や社会的評価について矛盾が生じている。戦後、中勸助は坪田譲治主宰『童話教室』〈2巻10号〉(桐書房、1948年11月)に「山がつとはしばみ」(詩)を寄稿した。その内容はシェル・シルヴァスタイン『おおきな木』(原著1964年出版)に近似する、木が愛情や慈悲の心を感じた人間に実や枝・幹を与え、切り株になるという内容であった。

中勸助の日中戦争期の詩集『吾往かん』(岩波書店、

1937年10月)初出の詩「涼しき蔭」には「樹木は切り倒されつつも樵夫に涼しき蔭を惜しまぬにあらずや」という「山がつとはしばみ」のテーマともいえる詩文「断片」が冒頭に記され「たぶん印度の古い教へのなかのものであらう」と続き、この詩文を賛美する内容になっている。

「山がつとはしばみ」のテーマともいえるこの詩文の原典をインド叙事詩「マハーバーラタ」12巻に発見することができた。それはバラタ族間の大戦後、勝利し新王となったユディシティラに対し英雄ビーシュマが死の床で授けた法の1つであった。本発表では「マハーバーラタ」が及ぼした「涼しき蔭」・「山がつとはしばみ」への影響、それを元に課題となっている中勸助の一連の戦争詩に対する中勸助による考えを探ることを目的とする。

## ドストエフスキー『未成年』と漱石『三四郎』における「疎外感」の問題

東京外国語大学(院) チャラコヴァ・マリア

本発表では、ドストエフスキーの『未成年』(1875年)と夏目漱石の『三四郎』(1908年)を題材として、当時の社会情勢および両作家の問題意識を考慮に入れながら、両作品における「疎外感」の諸相を比較検討し、分析する。

19世紀半ば以降、当時後進国とみなされていたロシアと日本はかつてないスケールで西欧文明をモデルに近代化を推し進めたが、外来の思想・文化との接触は様々な問題をも内包していた。

漱石におけるドストエフスキー受容については、古くから論じられてきたが、本発表では、ドストエフスキーの『未成年』と、漱石がドストエフスキーを読む前に執筆された『三四郎』を取り上げ、両作家に共通してみられる文明観および危機感による内

実の近似性、とりわけ両作品における「疎外感」の問題に焦点を当てる。いずれの作品も青年が上京をきっかけに、自分の居場所を模索する過程で人間関係に苦戦したり、金銭問題に初めて直面したりする中で成長し、自らの疎外感を克服していく物語であるということが出来る。両作品を近代文明批判の観点から比較考察することによってその類似・相違点を解明するとともに、二人の青年は同時に近代ロシアおよび日本の比喩としても機能していることを論じる。

## 漱石の「投出語法」とロツツェ、リーの「感情移入論」

— 人間の感情と心理の本質をめぐる —

上智大学（院） 福島 君子

夏目漱石(1867-1916)は『文学論』(1907)の第四編で「文学者は生命の源泉たる感情の死命を制して之を擒(とりこ)にせんとす」と言う。そのために必要となる手段の一つが「投出語法」‘projective language’(第一章)である。これは最も感情に富む人間に付着する語、例えば「笑ふ」「怒る」というような「情動の語」を用いて物を、ひいては世界を理解する語法であり、擬人法を含むものとした。

漱石は諸例を挙げた後、「自己の投出」の参照例としてヴァーノン・リー(イギリス人美学者、作家。1856-1935)の評論“Recent Aesthetics”(1904)から一部を引用訳出した。引用部分にはリーが「感情移入論」の核とする‘projection of our inner experience into the forms which we see and realise’の考えを示したルドルフ・ヘルマン・ロツツェ(ドイツ人哲学者。1817-1881)の

*Mikrokosmos* (1856-1864) から英訳引用した一節が含まれる。

先行研究には「投出語法」と“Recent Aesthetics”の比較から、読者の感情論について漱石の文学理論とリーの文学理論(*The Handling of Words*.1923に収録)の比較に及び、両者の異同を述べた論がある。

本発表では漱石の訳文を、リーの英文および英訳 *Microcosmos* (1885. tr. E.Hamilton& E.E.C.Jones) の英文と詳細に比較することで、リーの引用の仕方の独自性、ロツツェの論の身体性、漱石流に咀嚼した訳文という三者の特徴と共通性を明らかにする。加えて漱石もリーも論の末尾で投出 (projection) の心理が深く芸術や宗教の本質にも関わるとしている。この点の考察も両者の思想の深部を理解する新たな一助になると思われる。

## &lt; 没後 100 年の鷗外像 &gt;

## 【特別講演】

## 言論百年の礎 —— 森鷗外と岩村透

東京大学 今橋 映子

講演者は昨年(2021)、拙著『近代日本の美術思想——美術批評家・岩村透とその時代』(白水社、上下巻)を刊行した。これまで様々な理由で忘却されてきた岩村透は、優れた美術史家や美術批評家としてのみ再評価できるのではない。大逆事件下の困難な時代に、美術や学芸の自由を守ろうとした思想家であり、日本の美術界を、世界美術史や世界市場さえも視野に入れながら、再編しようとした美術行政家としても評価できる。そしてその思想や活動の随所で、森鷗外との驚くべき関係性が判明したのである。鷗外の短編「かのやうに」(1912年)が、実は岩村透を重要な対話相手として登場させた思想小説であることも、改めて注目に値しよう。

本講演ではとりわけ、文化芸術、学問の百年を見通して行動する知識人のあり方を、多面的に再考するよすがとしたい。昨年刊行した拙著『近代日本の美術思想』にもとづ

き、大逆事件の時代下に、森鷗外が美術界といかに関わっていたかについて新たに光を当てる。大逆事件と鷗外との関連を粗描した後、この時代に鷗外が作家・作家・学者の精神の自由が不可侵であることを信じて、それを様々な方策で守ろうとしたことを述べる。小説「かのやうに」に登場する画家の綾小路はその象徴である。美術批評家たる岩村透のパーソナリティーと思想が綾小路に投影されたありさまを明らかにしたい。

## 【ラウンドテーブル】

司会：明星大学 古田島 洋介

### 「戯曲のことばにおける実験」 大東文化大学 大西 由紀

森鷗外は三木竹二と共訳した初期の翻訳戯曲（『調高矣洋絃一曲』（明治22年）など）においては外国の登場人物に歌舞伎風のせりふ回しで語らせているが、後年には日本の歴史劇の登場人物に「現代語」を用いさせている（『静』（明治42年）など）。戯曲のことばにおいて鷗外がどのような実験を行っていたか、その背景にはいかなる理念があったのかを、金子幸代氏・井戸田総一郎氏らの先行研究を踏まえつつ検討する。

### 「鷗外漢詩の中国「素材」」 札幌大学 張 偉雄

森鷗外の漢詩には中国出自の典故が多く使われている。典故を利用することにより、表現の幅を拡げて詩句に「重厚感」を持たせ、効果的な暗喩をも容易に実現することができる。鷗外漢詩の典故利用の一般的な傾向、そして自らの詩情を創り上げるべく、如何に漢文の深い造詣に立脚して典故を変容させ、詩的效果の高揚を図っていたのかを考察する。

### 「森鷗外と記憶術」 明星大学 古田島 洋介

森鷗外は、「記憶」と題する一文において、記憶術に対する関心を示し、ドイツ留学中に謝金まで払って「ブレスラウの人フウゴオ、エエベル、ルムペ」から記憶術を学んだと述べている。「古人生没の年月、都市の人口等を記するは、余の難とせざる所なり」と豪語するに至った当時のドイツ式記憶術の実態は如何なるものであったのか、また、なぜ鷗外は記憶術に関心を寄せたのか等の問題を論じ、併せて英語の記憶術や日本の代表的な記憶術たる語呂合わせとの比較をも織り込んでみたい。鷗外の〈器用貧乏〉とも言える側面の一端を浮かび上がらせることができればと考える。

日本比較文学会東京支部ニューズレター 135 号

発行人：佐藤 宗子

編集委員会（編集担当）

委員長：椎名 正博

委員：鈴木 美穂 堀江 秀史 安元 隆子 庄子 ひとみ

事務局

事務局長：源 貴志 会計担当：南平 かおり

事務局委員：川野 礼音 小泉 泉 土田 久美子

芳賀 理彦 畑中 健二 蒔田 裕美

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒162-8644

東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学 文学学術院

源 貴志研究室

TEL：03-5286-3725